様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２９０９

研究課題名（和文）復員軍人の「心の中の戦争」―精神科診療録の分析と家族への聞き取りによる可視化

研究課題名（英文）War in the Mind of Japanese Veterans: Visualization through analysis of psychiatric records and interviews with veterans' family

研究代表者
中村　江里（Nakamura, Eri）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：２０７７３４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦時精神医療の中核を担った医療機関の戦後の診療録の分析及び復員軍人の家族へのインタビューを通じて、復員後長期にわたる旧軍人の心身の不調や、社会生活及び人間関係上の困難について明らかにした。とりわけ家族のインタビューでは、様々な苦しみを抱えながらも、医療や福祉を受給していたケースはほとんどなく、そのケアの負担は家族が抱えざるを得なかったと考えられる。また本研究では、「日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際的シンポジウム」を毎年オンラインで開催し、戦争のトラウマが個人や戦後の日本社会に及ぼした長期的影響に関する学際的・国際的研究交流を促進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
欧米の医学史研究においては、戦時中の兵士のトラウマとその治療について扱った研究は膨大な蓄積があるが、彼らの戦後について論じた研究は数少なく、本研究では時空間ともに異なる文脈で戦争のトラウマの影響について考察するものである。また、日本における復員軍人の精神疾患の研究についても、従来は医療機関に長期間入院していた「未復員」のみに焦点を当ててきたが、本研究は医療や福祉の制度外に存在していた復員軍人の心身の不調や社会的困難にも光を当てる点が独創的である。本研究は、復員軍人の家族会の活動と連携して行われ、メディアでも広く報道され、社会的インパクトも大きかったと言えるだろう。

研究成果の概要（英文）： Through analysis of postwar medical records of medical institutions that played a central role in wartime military psychiatry and interviews with family members of veterans, this study clarified the mental and physical illnesses and difficulties in social life and human relations of veterans for a long period of time after demobilization. In particular, interviews with family members revealed that few of them received medical care or welfare despite their various sufferings, suggesting that the burden of caring for them had to be borne by the family.
This study also facilitated an interdisciplinary and international research exchange on the long-term effects of war trauma on individuals and postwar Japanese society through the annual online Interdisciplinary Symposium on the Long-Term Effects of World War II in Japan.

研究分野：精神医療史

キーワード：戦後日本　トラウマ　患者と家族の歴史　未復員　精神医療アーカイブズ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

戦争と精神疾患の問題は、欧米では第一次世界大戦で注目され、ベトナム戦争後に「心的外傷後ストレス障害（PTSD: Post Traumatic Stress Disorder）」という診断名が生まれた。トラウマは 1970 年代以降は歴史学の対象となり、近現代の社会と文化を理解する上でも重要な役割を果たしてきた。これに対して日本では、1995 年の阪神・淡路大震災以降トラウマ概念が広く認知されるようになり、近年は戦争が軍人や市民に及ぼした精神的影響に関する研究が、精神医学・心理学のみならず歴史学・人類学などでも行われるようになった。

しかし、戦時中に精神疾患を負った軍人に関する研究と比べると、彼らの戦後の状況については、欧米、日本ともに研究の蓄積が少ない。統計上把握されているのは、戦傷病者特別援護法に基づいて戦後精神疾患のため入院・外来治療を受けた旧軍人・軍属が 1975 年～85 年頃をピークとして 1000 人程度存在し、入院患者については 2018 年に、入院外患者については 2020 年に最後の一人が亡くなったということである。家族の受け入れ拒否等の理由で、戦争が終わったにもかかわらず「未復員」と呼ばれたこれらの患者の戦後の長期にわたる療養の実態は不明な点が多い。さらに、精神の失調を抱えながらもこれらの医療制度の対象にならなかった人々も多数いたと考えられる。

２．研究の目的

本研究は、以下の二つを目的として行われた。

（１）戦争が個々の人間や彼らを取り巻くコミュニティ、ひいては戦後の日本社会全体に及ぼした長期的な影響を明らかにすること

（２）敗戦・非軍事化が心を病んだ旧軍人に対するケアや当事者の認識に与えた影響を明らかにすること

３．研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では以下の方法で三つの研究課題を遂行した。

（１）戦時精神医療の中核を担った医療機関の戦後の診療録の整理及び分析

戦時中軍事精神医療を行った陸軍病院、傷痍軍人療養所は、戦後国立病院及び国立療養所に改組された。これらの医療機関の診療録の電子化を行い、治療の実態や敗戦及び非軍事化が患者や医師、家族に及ぼした影響を分析した。

（２）旧軍人の家族へのインタビュー

復員後に精神の不調を抱えながらも医療を受給しなかった人々の実態を明らかにするため、旧軍人の家族（子ども世代及び孫世代）へのインタビューを行った。

（３）学際的・国際的な研究交流の促進

精神医学、心理学、歴史学、文化人類学、宗教学、政治学等の研究者とともに、「日本における第二次世界大戦の長期的影響」をテーマとする日本語・英語のオンラインシンポジウムを定期的に開催し、戦争とトラウマに関する学際的・国際的な研究交流を促進した。

４．研究成果

（１）敗戦直後の国立国府台病院診療録のアーカイブズ整理及びデータ収集

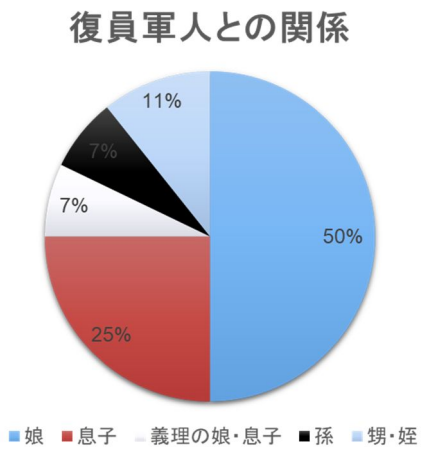
研究課題（１）に関しては、他の二つの研究課題が計画以上に進展したため対象を限定せざるを得なかったが、国府台陸軍病院（国立国府台病院）を昭和 20 年度退院患者 717 名分及び昭和 21 年度退院患者 93 名分の診療録の電子化作業及び基礎データ（病名、生年月日、階級、発病地、入退院日、治療日数、転帰、原職、留守担当者、傷痍疾病等差）の入力を完了した。

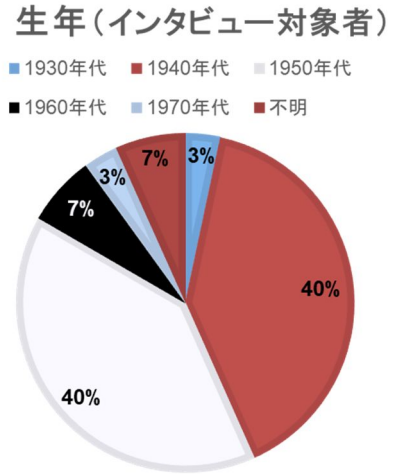
今後各事例について詳細に分析を進める予定だが、戦時中と同様に、精神を病み「再起奉公」できないことに対して強い恥の意識を抱く患者や家族が存在していたこと、戦争が終わった後も殺害の恐怖におびえる患者や、自分だけが生き延びたことに対する罪悪感を抱く患者など、戦時中の過酷な経験が長期にわたって精神的な影響を及ぼした事例を確認できた。

（２）戦争が旧軍人やその家族にもたらした影響

旧軍人の家族へのインタビューについては、一年目はまだ新型コロナウイルス感染症の影響もあり、慎重に進めざるを得なかったが、二年目以降は家族会の協力や関連するメディア報道が広く行われたこともあって、多くのインタビュー協力者を得ることができ、当初の計画以上に研究が進展したと言える。とりわけ 2022 年に「PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」による初めての証言集会が行われ、2023 年に朝日新聞デジタルの特集「戦争トラウマ　連鎖する心の傷」の連載が開始された影響は大きいと言える。

現在までのところ、30 名の方にインタビューにご協力いただくことができたが、復員軍人との関係や年代のうちわけは以下のグラフの通りである。





インタビューの中で度々語られたのは、戦争によって父（祖父）が人格的にすっかり変わってしまったという話である。戦前と戦後の変化は、身近に暮らしていた家族の語りを通じてこそ明らかになることであり、戦争のトラウマが復員軍人に及ぼした影響を知る上で、家族は非常に重要なアクターであると言えるだろう。

また、悪夢や戦場の過酷な経験のフラッシュバック、感情の暴発、生存者罪悪感、自殺などの心身の不調やメンタルヘルス上の問題も数多く挙げられた。とりわけアルコール依存症に関しては多く見られ、かなり重度で社会生活も困難な状況に陥っていたケースもあった。しかし、医療や福祉を受給しているケースはほとんどなく、多くの場合は妻や子どもがケアを担っていた。戦争でトラウマを負った復員兵に対する公的なサポートがほぼない中で、そのケア負担が復員軍人の妻子に重くのしかかっていたと考えられる。

復員軍人による暴力について指摘する家族も少なくなかったが、軍隊において暴力の客体（被害者）でもあり主体（加害者）ともなった元兵士のトラウマに着目することは、暴力の連鎖の構造について明らかにする上でも重要である。

インタビューの中では、こうした環境で育った子ども世代へのメンタルヘルス上の影響についても語られた。自己肯定感や自尊感情の低下、アイデンティティ形成の困難、経済的困窮や教育機会の喪失、他者との信頼関係構築の困難などが挙げられ、戦争が何世代にもわたる影響を及ぼした可能性が示唆された。

（3）戦争トラウマに関する学際的・国際的な研究交流のプラットフォームの構築

2021 年に「日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際的シンポジウム」を 5 回に分けてオンラインで開催したところ、多くの参加者が集まり、テーマの広がりを鑑みても継続的な取り組みが必要であるということで、2022 年度と 2023 年度にも三回ずつ開催した。のべ 700 名以上の研究者や精神保健・教育・メディア関係者、市民にご参加いただき、2021 年度のシンポジウムの成果として『戦争と文化的トラウマ―日本における第二次世界大戦の長期的影響』という書籍を日本評論社から出版した。

このプロジェクトでは、本研究がテーマとする復員軍人以外にも、沖縄戦の住民被害、被爆者、引揚者、戦争孤児、障害者、従軍看護婦など様々な戦争体験者のトラウマについて取り上げられ、戦争トラウマが戦後日本社会や文化に及ぼした広範な影響を多角的に議論することができた。2025 年の戦後 80 年に向けて、引き続きこのプロジェクトは継続予定である。（これまでの活動については、以下のウェブサイトに掲載されている。https://scholars-net.com/cultural_trauma/）。

なお、本研究の成果も学際的・国際的な発信を行い、『BRAIN and NERVE』への論文寄稿、日本看護歴史学会、精神医学史学会での教育講演、トラウマティック・ストレス学会での研究報告、「日蘭イ和解の会」での講演などを行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中村江里	４．巻 7
２．論文標題 帰還兵たちの〈沈黙の海〉―軍事精神医療の歴史と証言から考える	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 128～136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村江里	４．巻 27巻1号
２．論文標題 心を壊された日本軍兵士たち－アジア・太平洋戦争とその長期的影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 精神医学史研究	６．最初と最後の頁 13～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村江里	４．巻 75巻9号
２．論文標題 「社会的苦しみ」としての戦争トラウマ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 BRAIN and NERVE	６．最初と最後の頁 1059～1064
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1416202472	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　7件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 心を壊された日本軍兵士たち ―第二次世界大戦とその長期的影響―
３．学会等名 第25回日本精神医学史学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Eri Nakamura
２．発表標題 Experience and Public Discourse of Psychological Trauma in Japan during and after the Asia-Pacific War
３．学会等名 Workshop on PTSD, Psychiatry, Traumatic Memory（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Eri Nakamura
２．発表標題 War in the Postwar Family: Postmemory of the Asia-Pacific War in Japan
３．学会等名 Symposium on Intergenerational Transmission of Trauma And Moral Injury as a Consequenece of War（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 近代日本における戦争とトラウマの歴史
３．学会等名 トラウマと文化：異文化間比較の観点からみた青年のストレスとレジリエンスの国際会議,（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 日本軍兵士と「加害者のトラウマ」再考
３．学会等名 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム 第三回　トラウマとポジショナリティ（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 戦後家族の中の「戦争」―復員軍人のトラウマと世代間の影響
３．学会等名 第22回日本トラウマティックストレス学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 兵士たちの心の中の戦争
３．学会等名 日本看護歴史学会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村江里
２．発表標題 トラウマ研究から見た坂本正直作品
３．学会等名 立命館大学国際平和ミュージアム 平和教育研究センター 第30回メディア資料研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Mark S. Micale, Hans Pols, Harry Yi‐Jui Wu, Eri Nakamura, Ran Zwigenberg, Jennifer Yum Park, Narquis Barak, Vannessa Hearman, Caroline Bennett, Hua Wu, Dyah Pitaloka and Mohan J. Dutta, Seinenu M. Thein-Lemelson, Saiba Varma, Maki Kimura, Byron J. Good	４．発行年 2021年
２．出版社 Berghahn Books	５．総ページ数 406
３．書名 Traumatic Pasts in Asia	

１．著者名 一ノ瀬俊也、野上元、河野仁、渡邊勉、阿部純一郎、中村江里、佐々木知行、清水亮、佐藤文香	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 266
３．書名 社会のなかの軍隊／軍隊という社会	

１．著者名 吉田裕、中村江里、松田英里、平井和子、張宏波、大串潤児、金奉湜、松田圭介、森脇孝広、李宣定、森茂樹、加藤祐介、瀬畑源	４．発行年 2021年
２．出版社 大月書店	５．総ページ数 384
３．書名 戦争と軍隊の政治社会史	

１．著者名 竹島正、森茂起、中村江里	４．発行年 2023年
２．出版社 新日本評論社	５．総ページ数 352
３．書名 戦争と文化的トラウマ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム２０２２	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム	開催年 2021年～2021年

国際研究集会 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム2023	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関